

ドゥンス・スコトゥスにおける 個体化の原理の完全性について

小川量子

序

ドゥンス・スコトゥスは、主著 *Ordinatio* において天使の個体化の原理を理解するという神学的名目の下に、七問にわたって個体化の原理について論究している⁽¹⁾。彼がそこで第一に問題とするのは、「質料の実体はその本性 *natura* から個であるのか」ということである。もし事物がその本性によって個であるならば、事物の本性はそれ自身で *de se* 個でなければならず、個体化の原理など必要としないはずである。しかしその場合、本来個であるはずの事物の本性が、何故「人間」とか「馬」というように、多くのものに普遍的に語りうるものとして捉えられるのかが理解できなくなるとスコトゥスは指摘する。即ち、我々は事物を本来のあり方とは異なるあり方のもとに認識しているという矛盾が起るからである⁽²⁾。そこで我々の本性認識が単なる知性の虚構 *figmentum* とならずに客観性を持つためには、その基盤となる本性の実在性 *realitas* は、それ自身で個であるのではなく、多くの事物に共有可能な実在性として理解されなければならない⁽³⁾と考えるのである。このことから本性は事物において個であるために個体化の原理を必要とすることになるのである。

このようにして本性は我々に「何であるか」が認識可能な実在性として捉えられることになるが、その結果必要とされる個体化の原理は我々の抽象的な認識によっては捉えられないものと考えなければならなくなるのである。それ故個体化の原理は「何であるか」を語りえないものとして考えざるをえないのである⁽⁴⁾。しかしそれでは個体化の原理について一体何が語りうるのかが当然問題となるであろう。スコトゥスは、他者の見解を批判して個体化の原理を「何か」でないものとしてネガティブに語るだけでなく、事

物におけるポジティブな実在性としても語っているのである。そこで、この小論においては、スコトゥスが如何なる観点から個体化の原理をポジティブなものとして捉えているのかを問題にしたいと思う。

I ガンのヘンリクスに対する反論

スコトゥスはしばしばガンのヘンリクスを論敵としているが、個体化の原理の問題においても、第一に批判的とするのは、個体化の原理が「否定」negatio であるとするヘンリクスの見解である。⁽⁵⁾ヘンリクスは、個がそれ自体として分けられないもの *individuum* であり、また他と異なるものであるのは、本性からその「分割可能性」と「他に対する同一性」とが取り除かれたことによる⁽⁶⁾と考え、このような二重の否定こそが個体化の原理であるとするのである。⁽⁶⁾即ち、ヘンリクスにおいて個体化の原理は本性から「何か」を取り去るネガティブな性格しか持たないものとして捉えられているのである。

スコトゥスはこのようなヘンリクスの意見に直接反論する前に、如何なる意味で個体化の原理を問題とするのかを明らかにしようとし、そのうえで否定がそのような問いの答えとなりうるのかを検討している。彼はまず、「本性」や「個」という言葉が単に論理学的概念（第二次志向）を意味するならば、何によって本性が個であるのかを問わないとした後で、現実の問題としても、何によって本性が現実⁽⁷⁾に個であるのかとは問わないと言うのである。

何故スコトゥスがこのように語るのかを理解するためには、彼が「個であること」を如何なることとして捉えていたのかを知る必要がある。彼は、個を単に「分けられないもの」と言うだけでなく、「分けられることが自己に矛盾するもの」であると言う。ここで「分けられる」と言うのは、物理的ないし量的な意味での分割ではなく、同じ本性を持つものに分けられるという意味で語られるのである。⁽⁸⁾何故なら、質料的な個を量的に分割することはできても、ソクラテス個人であることは多くのものに共有されないからである。そもそも、もし個がこのような意味で分けられるならば、それは本性であってそれ自身で個ではないと言わざるをえなくなるのである。それ故スコトゥスは「個であること」を「それ自身と同じである多くのものに分けられることが矛盾するもの」として捉えるのである。⁽⁹⁾

さて、話を問題のたて方に戻すと、もし先程のように「何によって本性が個であるの

か」と問うならば、「分割に矛盾することによって」というように答えられるとスコトゥスは考えるのである。しかしこのような答えでは、「個であること」の意味が分析されているにすぎない。そこでさらに個におけるこのような矛盾の成立そのものを根拠づけるものが問われなければならないとするのである。即ち、スコトゥスは個において分割に対して矛盾する直接の内的基盤 *fundamentum* となるものが個体化の原理として問われなければならないと考えるのである。それ故スコトゥスにおいて、「何によって本性は個であるのか」という問いによってではなく、「個において個であることを根拠づけているものが何か」という形で個体化の原理は問われることになるのである。

そこで次にヘンリクスの主張する「否定」によって、分割に対する矛盾が根拠づけられるかが問題となる。これに対してスコトゥスは、「否定」によって、あることに対する直接的な可能性 *proxima potentia* を取り去ることはできても、根本的な矛盾を成立させることはできないと考える。⁽¹⁰⁾ 例えば、盲人は視力を欠くことによって見るができないのであるが、盲人に見ることが矛盾しているとは言えないのである。何故なら、盲人には見るができるようになる可能性が全く無いわけではないからである。しかし個にとっては、分けられる可能性を考えることはできないのである。それ故、ヘンリクスの言うように、本性から分割可能性を取り去るだけでは、個における矛盾の成立を説明するには不十分であると考えられるのである。即ち、ヘンリクスが、個体化され分けられないものとなっている本性のあり方から個体化の原理を捉えようとしたのに対し、スコトゥスはあくまでも本性のあり方からは個であることを説明することはできないと考えるのである。そのためヘンリクスが個体化の原理を本性に対するネガティブな関係性とみなすのに対し、スコトゥスはそのような関係性の基盤となるポジティブな存在性が必要であると言うのである。従って個体化の原理は本性を個体化するものであっても本性への関係性だけから意味を持つのではなく、本性自身が持たない「分割への矛盾」を根拠づけるものとして独自の存在理由を持つのである。このようにしてスコトゥスは、同一事物の中に、共通性 *communitas* と個体性 *individualitas* という異なる意味内容を根拠づけるために、本性と個体化の原理という2つのポジティブな実在性を指定することになったのである。

II 分割可能性と不完全性

ところでスコトゥスは、個体化の原理がポジティブな実在性であることを、それが完全性であることから示しうると考える。彼は、極めて簡単に、「分けられること」が不完全性であることから、このような不完全性に矛盾するものである個体化の原理は完全性⁽¹¹⁾でなければならないと言うのである。ここで「分けられる」と言うのは、既に述べたように、本性が多くのものに共有されることを意味するわけであるが、何故それが不完全性であるのかはここでは説明されていない。

しかしこのような本性の分割が実際に行なわれるのは、生物においては「子」を産むという生成 *generatio* の場合である。スコトゥスは、「御父」が「御子」を生むというペルソナの生成について語るために、被造物における生成の完全性について言及している。彼は生成が被造物における完全性を意味するとしても、端的な意味での完全性 *perfectio simpliciter* ではなく、あたかも惨めな者にとって惨めな状態において慰められることが完全性であるのと同じような意味での完全性にすぎないと言うのである⁽¹²⁾。何故なら、生成によって自己と似たものが生み出されるとしても、自己と異なるものであるかぎり、自己は滅びゆくものとどまるからである。それ故、生成とは、滅びゆくという惨めさにおいて、その不完全性を種の保存という形で補うものにすぎないのである。そのことからスコトゥスは、生成において本来意図されているのは、差異性ではなく類似性であり、さらに類似性の方が差異性よりも完全性を意味すると言うのである⁽¹³⁾。それ故、被造物において、同一の本質ないし本性が共有されることは完全性であるが、それが異なって分けられることは不完全である⁽¹⁴⁾と考えるのである。このようにスコトゥスは、完全性の観点から、本性の「共通性」と「分割可能性」とを区別するのである。

しかし同じ本性を異なって共有するということはどのように理解されるのであろうか。スコトゥスは、個々のものにおける本性の差異性を内的固有の様態 *modus intrinsicus* と言われるあり方において捉えようとする。例えば、同じ「白さ」にも様々な濃度があるように、偶性に先だつ実体の本性の完全性においても様々な度合ないし段階 *gradus* があると考えるのである⁽¹⁵⁾。即ち、「何であるか」 *quid* に関して同一であっても、それが「如何にあるか」 *quale* に関しては、個々のものにおいて度合の多少 *magis et minus* という差異を持つと言うのである⁽¹⁶⁾。そしてこのような内的固有の様態は、個的差異であるため本性の抽象的な理解において捨象されるが、本性の具体的なあり方として、本性

(17)
と実在的に区別されない差異であると考えられる。

スコトゥスは、本性がこのような完全性の度合を持つことも、本性が分けられることから説明するのである。何故ならこのような完全性の一つ一つの段階は、同じ本性を分けつつ部分として捉えられるからである。そこで本性は変わらずに、本性の完全性の度合は増減しうるのである。しかし部分であるものがいくら加わっても、部分の複合にすぎないため、ある段階の完全性を持つことは、ある段階の完全性を欠くこととして捉えられるのである。(19)それ故スコトゥスは、本性が分けられることには、必然的に不完全性が伴われると考えるのである。

しかしこのように本性が個々のものに分けられることは、ある段階の完全性へと制限されることであるため、無限な完全性を持つ神の本性にはあてはまらないとされるのである。即ち、神は内的固有の様態が無限であることによって、その本性の完全性を全き充満において *in tota plenitudine* 有すると考えられるからである。(20)それ故、神の本性は分けられないものとして、個体化の原理なしにそれ自身で個であると考えなければならないのである。(21)

しかしながら、神の本性は個であることによって、共有可能性 *communicabilitas* を失うわけではないと言う。即ち、スコトゥスは、神の本性が3つのペルソナに全く等しく同一なこの本性として共有されると考えるのである。そのため、3つのペルソナは神であると語りうるが、3つの神とはならないと説明される。(22)従って神において個であることは、他との関係性を排除するのではなく、関係性の中における完全な同一性として捉えられるのである。しかし、有限者においてはこのような完全な同一性が実現しえないために、その本性が分けられるのである。このようにスコトゥスにおいて、「分けられること」は有限性に基づく不完全性として捉えられているのである。

Ⅲ 個の完全性

従って本性は分けられて個となることによって、ある特定の段階における完全性へと制限されるため、個体化の原理は本性に対してはネガティブな意味を持つことになる。それ故、個体化の原理は事物における最終的な限定を与えるものとして究極的现实態性 *ultima actualitas* と呼ばれるとしても、形相が質料を完成するように本性を完成するわけではなく、また事物における最高の完全性を意味するわけでもないと言われるのであ

(23)
 る。スコトゥスは本性の方が、個的差異をもたらす個体化の原理よりも完全であるとも述べている。⁽²⁴⁾

しかしスコトゥスが個体化の原理の完全性について語るのは、同一事物における本性と個体化の原理を比べる場合ではなく、第一実体である *suppositum* を第二実体である本性と比べる場合なのである。彼は、まず本性がそれだけでは存在しえず、個体化されて *suppositum* においてのみ存在することから、*suppositum* の方が本性より完全な意味で実体であり、自体的に存在するものであると言う。さらに、*suppositum* は個として数的に一なるものであり、多に分けられうる一性しか持たない本性よりも完全な一性を持つとも述べられる。そしてこのような「存在」と「一性」における *suppositum* の本性に対する優位は、個体化の原理である *ultima actualitas* によると説明するのである。⁽²⁵⁾

しかしこの場合でも *suppositum* の持つもう一つの特徴である「非共通的である」という側面は、完全性によるのではないと述べている。⁽²⁶⁾ 何故なら、個が非共通的であるのは、本性が分けられて差異を持つことと関連しているからである。即ち、個体化の原理は本性を制限するものとしては完全性とは語られないのである。従って、有限者において、「個であること」には、「非分割性」*individualitas* と「非共有性」*incommunicabilitas* という二つの側面が区別されているのである。スコトゥスは、前者を *suppositum* の完全性として捉えるが、後者の意味では偶性についても個性性を語りうるとするのである。⁽²⁷⁾ 従って個体化の原理はあくまでも *suppositum* を成立させる *ultima actualitas* としてのみ完全性と言われるのである。

さらに、端的な完全性 *perfectio simpliciter* と呼ばれる、それ自体のうちに如何なる不完全性も含まない完全性も、本性への関係によらず、*suppositum* において捉えられなければならないと言う。⁽²⁸⁾ 何故なら、これらの完全性は、「人間の善」と言うように、有限な本性の完全性としては、限定されたものとして理解されるからである。しかし *suppositum* においては、本性に関わりなく「この善」として成立しているものとして捉えられるのである。そこで、アウグスティヌスの有名な言葉である『この善、あの善。このを取れ、あのを取れ。そしてなしうれば、善そのものを見よ』⁽²⁹⁾ に対しても、もし「この善」がある段階に限定された善、即ち有限本性の完全性を意味するならば、無限な善である神の認識を妨げるので除去されるべきだとするが、もし「この善」が特殊

化によるしるしづけられた善 *bonum signatum* を意味するだけならば、善を端的に理解することを妨げず、その形相的根拠である神に還元することができるとするのであ⁽³⁰⁾る。即ち、スコトゥスにとって、個であることは、端的な完全性の普遍的な一義的理解を可能にする条件ともなっているのである。

さらにスコトゥスは、個はその個体化の原理の完全性のために、無限を形相的に含み⁽³¹⁾うると語っている。それは、個が個体化の原理という *ultima actualitas* を持つことによってそれ以上限定されないものだからである。それ故、個であることによって、本来無限な完全性である端的な完全性を理解することが可能になると考えるのである。即ち、有限者において、個であることは、その有限性にも関わらず、無限な完全性を現わしうる次元として捉えられているのである。

結

スコトゥスは、個体化の原理の完全性について、強調することもなければ、特に大きく扱っているわけでもない。そもそも彼が個体化の原理を完全性として捉えるのは、分けられえないこと、即ち最も完全な意味で一であることの根拠であるからであり、ポジティブな存在性として措定するのもそのことに基づいている。しかしこのような一性を持つものとして *suppositum* は、それ自体で存在するものであるわけであるが、個体化の原理自身はそれ自体で存在するわけではないのである。またこのような *suppositum* において語られる端的な完全性にしても、個体化の原理自体が端的な完全性を担っているわけではないのである。このように考えると個体化の原理の完全性が如何なる完全性であるのか分からなくなる。

しかしスコトゥスにおいては、まさに「一であること」が存在しないし完全性について語る基準となっているのである。既に述べたように、本性は他と同一である共通性としては完全であるが、多に分かれうるかぎりで不完全なのである。また、個体化の原理は *suppositum* という一つの分けられない全体性を形成するものとしては完全性なのであるが、それ自体は *suppositum* を構成する部分的な存在性であり、本性を制限するものにすぎないのである。そしてこのような、数多性や部分性が克服されるのは、本性がそれ自体で個である無限な神の場合であり、その場合にこそ端的な完全性が完全な意味で語りうると考えられるのである。

このようにスコトゥスは、一性の観点から被造物における様々な完全性を区別するとともに、その不完全性をも示すことによって、神の完全性について語ろうとするのである。その場合、最も完全な一性として主題化されるのが、分けられえないもの、即ち個の一性なのである。

註

テキストは *Ordinatio* 及び *Lectura* に関しては、ヴァティカン版 (Duns Scoti Opera omnia. studio et cura Commissionis Scotisticae ad fidem codicum edita. Civitas Vaticana, 1950 ff.) を用い、その他 *Reportata Parisiensia* 及び *Quodlibetum* に関してはヴィヴェス版 (Duns Scoti Opera omnia. Editio nova. Paris, Vivès, 1891—1895. vol. 26) を用いた。

(1) *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1—7.

(2) *ibid.*, q. 1, n. 7.

(3) *ibid.*, n. 23.

(4) スコトゥスにおいて「何であるか」を語りうるものは本性に限られる。そこで個体化の原理は何性 *quidditas* とは異なる理拠 *ratio* として扱えられるのである。

(5) *ibid.*, q. 2.

(6) Henricus Gand. *Quodl.* V, q. 8 in corp. ヘンリクス の個体化の原理については J. Paulus, *Henri de Gand. Les Tendances de sa Métaphysique*, Paris, J. Vrin. 1938. 326—378 を参照。

(7) *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 2, n. 48.

(8) *ibid.*, q. 4, n. 106. スコトゥスは、個が量的分割によらないことを、量による個体化に反論する大きな理由として挙げているのである。

(9) *ibid.*, q. 2, n. 48. 'cui formaliter repugnat dividi in plura quorum quodlibet sit ipsum'.

(10) *ibid.*, n. 50.

(11) *ibid.*, n. 52.

(12) *Lect.* I, d. 7, q. un., n. 119., 及び *Ord.* I, d. 7, q. 1, n. 64.

(13) *Ord.* I, d. 7, q. 1, n. 48.

(14) *Rep.* I, d. 2, q. 8, n. 4.

(15) *Lect.* I, d. 17, p. 2, p. 4, n. 219.

(16) *Ord.* I, d. 17, p. 2, q. 2, n. 253.

(17) *Ord.* I, d. 8, p. 1, q. 3, n. 139.

(18) *Lect.* I, d. 17, p. 2, q. 4, n. 218.

- (19) *Ord.* I, d. 8, p. 1, q. 2, n. 32.
- (20) *Quodl.* q. 7, n. 31.
- (21) *Ord.* I, d. 8, p. 1, q. 3, n. 149.
- (22) *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 39.
- (23) *Rep.* II, d. 12, q. 8, n. 4.
- (24) *Ord.* I, d. 7, q. 1, n. 48.
- (25) *Rep.* I, d. 26, q. 2, n. 11.
- (26) *ibid.*, n. 12.
- (27) *ibid.*, n. 13. このためにスコトゥスにおいて *ratio singularitatis* と *ratio suppositi* とは異なるとされるのである。 *Lect.* d. 4, q. un., n. 7.
- (28) *Quodl.* q. 5, n. 13.
- (29) Augustinus, *De Trinitate*, VIII, c. 3, n. 4.
- (30) *Lect.* II, d. 3, p. 2, q. 2, n. 305. 及び *Ord.* I, d. 2, q. 3, n. 187.
- (31) *Ord.* I, d. 8, p. 1, q. 3, n. 150.

この小論は、1985年秋九州大学で行われた中世哲学会第34回大会で発表したものに、題を変更し、手を加えたものである。